

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

「梅棹忠夫著作集」全22巻解題：第3巻 生態学研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 千里文化財団 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 和信 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008541

生態学研究

*フィールドの生態学

*動物の社会的干渉

*生物学の思想 *自然と人間



わたしは毎日の行進に際しては、腰に弾帯をまき、十数発の散弾を常時携帯し、肩には二連装の散弾銃をかけていた。さらに、バネ枠の捕虫網をもった。キャンプ地につくと、その日にしとめた鳥の皮をはぎ、……(本書八四頁)。

これは、一九四二年の北部大興安嶺探検の際の梅棹忠夫のフィールドでのようすである。当時、彼は動物の採集を担当しているために銃や網が必要であったのだ。黒竜江上流で魚を釣りあげ、胃の内容物を分析して食性を量的に把握した研究が、卒業論文の一部というには驚く。森林ステップでは、シカの一種であるノロという動物を観察して、オロチョン族の野火によって植生が変わり、そこにノロが集まり狩猟が成り立つという。これは、人為作用を無視できない最近の生態学理論にも通じる考え方である。

本書は、「フィールドの生態学」、「動物の社会的干渉」、「生物学の思想」、「自然と人間」という四部から構成される。前二者からは、それぞれフィールドと実験という方法の違いはあるが、梅棹の動物生態学の真髄を知ることができる。彼は、動物の社会のなかで組織のある社会とない社会とに分けて、後者の例として池の中のおたまジャクシの群れを選んだ。そして、社会干渉や場の指数などの概念を導入して確率論を援用することで実験的研究を進めた。これらの成果は、博士論文として結実する。

本書は、先行研究を批判的に捉えてフィールドや実験室で実証していく「科学者」としての梅棹の基本姿勢をうかがうことができる。同時に、当時の生態学をめぐる状況をみると、統一的な理論が欠乏しているなど、現在の文化人類学のかかえている問題と共通している点も多い。梅棹自身にとつての生態学研究とは、その後の広大な研究領域に展開する準備として、自らのスタンスを若い時期に確立するための土壌づくりであったのではないだろうか。(池谷和信)